慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小泉経済学とマルクス労働価値説
Sub Title	Koizumi economics and Marx labor theory of value
Author	伊東, 岱吉
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.11 (1966. 11) ,p.1196(26)- 1217(47)
JaLC DOI	10.14991/001.19661101-0026
Abstract	
Notes	小泉信三博士追悼特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661101-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小泉経済学とマルクス労働価値説

伊東岱吉

一

小泉信三博士の経済学研究の位置づけについては、既に中山伊知郎博士が「小泉経済学の本質」（「三田評論」特集号「追悼・小泉信三」一九六六年八・九月合併号）において、「小泉先生の経済学という場合、もっとも光っているのは、何といっても英国の古典学派ことにリカルドーの研究である。……先生はこの研究を通じて、経済学の本質をしっかりとつかんだ。後にマルクス批判となって現われた考え方は、全くリカルドーの延長であってそれ以外ではない。……ある人々は小泉先生のマルクス批判を主観主義価値論の立場からするものとして、後の限界効用学派の中に数えている。……が、間違っている。小泉経済学にとって、マルクス批判のよって来るところは、深く、しかも専らそのリカルドー解釈の中からでている。この点が先生のマルクス批判をして重からしめた理由であった」と述べられているが、私も同感であって中山博士の評価は正確と思う。中山博士はさらにリカルドー研究におけるシュムペーターと小泉先生の相違点の比較から両者の立場の相違を論じ、「小泉説はリカルドーをそのままの姿で、すなわち純粋理論という形で裸にしないで、認めようということになる。……先生が自分は正統学派の立場に立つという場合、その立場ははるかに純粋な理論をこえたものであったと思う」と述べ、つぎにマルクスのリカルドーに対する解釈のゆきすぎ、「過剰解釈」に関する両者の批判の一致について興味ある指摘をして、「現代の古典派経済学者として自ら任じていた先生の中には、その意味で経済学者以上のものがあったとおもわれる。」として、「小泉経済学の本質」を結んでいる。

小泉先生がマルクス経済学批判、とくにその労働価値説の批判をする場合の立場は、中山博士が簡潔明確にいわれる通りのものであり、リカアドオが労働価値説を貫き得ずして「労働」以外に「時間」の要素を認めざるを得なくなった、いわゆるリカアドオの「修正」を認める立場に立ち、この立場からマルクスを批判する。したがって、これとは逆に、リカアドオのこの「修正」を以てリカアドオ学説の崩壊（俗流化）とみ、この「修正」なしに本来の労働価値説をその独特の弁証法と唯物史観の立場で深化・発展せしめようとしたマルクス経済学を、「過剰解釈」、一面的誇張とみる小泉先生の批判が生れてくるのである。

ここでは先生のマルクス経済学、とくにその労働価値説批判に焦点を当てながら、先ず小泉経済学の形成過程を辿り、さらに狭くはわが慶応義塾において、広くはわが国の経済学展開史上において果した役割り、あるいはそのもつ地位なり意義について私の感想を概括してみたい。

二

右のリカアドオの「修正」と小泉経済学の立場についてさらに立入ってみよう。リカアドオは一貨物の価値（交換価値、この場合は、市場価格に対する自然価格）は、その生産に要せられる労働量によって定まるとした。かれは「利用は交換価値に取って絶対的に欠くべからざるものではあるが、其尺度ではない。既に利用を有するものとすれば、諸貨物の交換価値は二

個の泉源より生ずる。即ち貨物の稀少性からと、之を取得せんが為めに要する労働量からとである。」（リカアドオ・小泉信三訳「経済学及課税之原理」岩波文庫、七―八頁、傍点伊東）とし、「稀有なる彫像絵画、稀覯書及び古銭」等再生産不可能財については、稀少性によってその価値が決定せられるが、これらは交換せられるもののうち極く少ない一部分にすぎず、最大部分を占める再生産可能財は労働生産物であって、その価値は「其生産に必要なる相対的労働量に由て定まる」とした。

しかし、市場価格がそのときどきの需要供給によって変動しながら、これが結局、自然価格に帰着するのは、生産上に競争上の制限がないこと、即ち自由競争が前提とされ、資本の異部門間の自由移動による利潤率の平均という作用によるのである。ところで異種産業間で必要とされる固定資本と労働量との間の比例に差があり、あるいは生産物が市場に出て売れるまでの時間に差があれば、これを要するに、過去の労働の所産ではあっても資本が「寝かされる」時間が長ければ長いほど、その商品の自然価格は、利潤率平均の作用で、然らざるものの労働量に基く価値よりも高くならざるを得ない。かくて、自然価格は生産に費された労働量に一致するとはいえなくなる。この難問がリカアドオをしてかれの価値法則の再考、あるいは修正を促した。

リカアドオはその「原理」の第一版から第三版にいたるまでの思索によって、いよいよこの「修正」を重視するようになり、そしてかの有名なマカロック宛の手紙（一八二〇年五月二〇日および六月一三日付）の中で、明瞭に、価値を定める原因として、（一）それぞれの商品の生産に要せられる労働量、のみならず（二）生産物が市場に出て売れるまでにかかるそれぞれの時間（生産上固定資本が寝かされる時間の問題も同じ）をも認めることになったのである。

小泉先生の「経済原論」を読むと、基本的には右のリカアドオの「修正」の立場に立っている。先生は、限界効用説によって需要供給説は初めて精密に説明されたが、効用説と費用説（これは労働量と、時間―あるいは待忍・節約の二要素を基本とみる）とは、ジェヴンスやオーストリア学派の人々が自らの限界効用説を「新奇なる意見」として、それまでの生産費説と全く相容れ難きものの如く説くのは誤りであって、両者は決して相容れ難いものではない。「稀少財に就いては、リカアドオは無論限界効用性を拒否しない。ただ任意に再生産し得る貨物に就いて、彼れは効用論者以上に更に一歩を進めて、労働費用がより明確な尺度を供すると云ったに過ぎぬ」というハインリッヒ・ディッツェルの所説に賛成し、「貨物の価値を決するものは何処迄も需要と供給或は効用と稀少性とであり、労働費用又は生産費は此の供給又は稀少性を左右するものとして、初めて価値に影響するのであるから、効用学説は生産費説に対して特殊に対する一般の地位にあり、たゞ其場合に生産費は効用よりも一層明確に価値を測定せしむることがあるといふに過ぎぬ」（小泉信三「経済原論」二九三―四頁）と結ばれている。

右のように先生はリカアドオの延長の上に、其後のイギリス正統学派、ドイツ歴史学派、あるいは限界効用学派をはじめ、グスタフ・カッセル、ウィルヘルム・レキシス等当時までの経済学発展の成果を織り込みつつ、その「経済原論」を展開されている。マルクスについても、かれが理論経済学者としてはリカアドオを以て出発したことは、争い難く明白である、として、「哲学の貧困」（一八四七年）「賃労働と資本」（一八四九年）「価値・価格及び利潤」（一八六五年）の中より、リカアドオ的論理の例証をあげて、マルクスが「経済学批判」第一輯（一八五九年）以後、それ以前の誤りや歪みを克服してついに「資本論」（一八六七年）の完成に到達した変化・発展（これについては、マルクス「賃労働と資本」におけるエンゲルスの序文参照）についてはその価値を認めようとされない。むしろリカアドオが当面した困難を一九五九年以後のマルクスは、いわゆる弁証法的詭弁、あるいは形而上学的論理をもって、解決したようにみせているとみる。少くとも後思案による無理なこじつけとみる。したがって、労働価値説―剰余価値理論は経済理論としては成立しない。さらにまた、「その資本主義の必然的崩壊の説明は、過剰の労働者と過剰の商品の造出に求められるのであるが、この二つの過剰の説明に特定の価値理論が必要でない」（小泉信三「経済分析に於けるリカアドオとマルクス」「日本学士院紀要」第二十四巻第一号、昭和四十一年三月）とされる。「然らば価値理論はマルクシズムにとって不必要なものであるか。決してそうではない。……それは、いうべくんば、

認識のためよりは行動のために、理論的よりは政治的の必要である」（同上論文）と結論される。この「経済分析に於けるリカアドオとマルクス」という論文は、戦後久しく経済論文から遠ざかっておられた先生が昭和四十年六月、学士院で報告されたもので、恐らく経済論文としての絶筆に当るものと思われるが、晩年の先生の考え方が最も卒直に表明せられている点で注目される。

さらに先生のマルクス経済学と対照的な考え方の相違の特徴点をあげると、超歴史的な経済本則においても、単純商品生産においても、生産手段が用いられ、迂回的生産が行われる場合、人間はその労働支出において、もし労働の成果の実現までに遅速があるならば、同一労働量の生産においても、もし交換比例において同一ならば、実現の速い方を択ぶであろうから、「時間」（待忍）は、資本主義でなくとも「労働」と並んで考えられねばならぬ要素である、と考えられている。資本主義においては、この「時間」が利潤の基本的な原因であるとみる。この考え方からしても、資本論冒頭の商品を、資本制的モディフィケーション＝生産価格化の論理的捨象の上に立つ「ただの商品」で、資本制生産に歴史的に先行する単純商品生産と照応するもの、という解釈に対してもこれを認める立場にはなく、「資本論第三巻補遺」におけるエンゲルスの、ほぼ労働価値通りに行われたとする単純商品生産段階より利潤率の平均、生産価格への、歴史的過程の内的諸連関の論理的追跡の試み（これはマルクシストによってもっと社会経済史的研究で展開されねばならぬ問題でもあるが）についても先生の承認し得られぬところである。

つぎに、マルクスは賃労働者が資本家に売る商品は、「労働」ではなくして「労働力」であるという理論的発展を「賃労働と資本」以後の変化において行い、しかも、「労働力の価値」と賃労働者の資本家の下で行う労働量との差額から剰余労働―剰余価値論を成立せしめたことは周知の通りであるが、先生はこれを認めず（その理由は「労働力なるものが若しマルクスの謂ふ如くエネルギイを出す肉体的精神的の力であるならば、労働者は決してそれを手離して他人に売ることは出来ない筈である。労働力は飽く迄も労働者に属し其購買者は決して之を我物とすることは出来ない。出来るのはただ己れの為めに其労働力を行使して労働せしむることのみである」小泉信三「経済原論」一七四頁）労働者が資本家に傭われることは「労働の給付を売る」のであって、賃金は「労働給付の価格」であり、賃金を決定する「最も主要な要素は労働の相対的欠乏」であるとされる。

右の立場から先生はマルクスの搾取論を批判され、「労働に比して生産財が欠乏してゐれば賃銀は資本家に有利に定まるし、反対に労働が欠乏すれば労働者の願望が多く通る」「その願望が何処まで貫徹されるかはたゞ市場の状態が之を定める」（上掲「原論」一七三頁）とされた。こうして、マルクスの労働価値説も剰余価値理論―搾取の理論も先生の承認しうるものとはならなかったのである。

三

小泉先生は義塾の普通部から大学予科を経て、明治四十年（一九〇七年）政治科に進み、ここで経済学を本格的に学んだ。当時の政治科は塾生の精鋭を集めていた科で、小泉先生の先輩で義塾経済学確立の双璧とされた高橋誠一郎先生もここに学んでおり、東京高等商業学校（現一橋大学）から招かれて塾で教えていた福田徳三博士の講義も小泉先生をひきつけた魅力であった。小泉先生の経済学研究にいろいろな意味で第一に影響を与えたものは福田博士であり、ついで堀江帰一博士であった。社会主義とくにマルクシズムについての関心は福田博士の啓発によるところが多いが、先生が政治科を卒業して教員に採用された明治四十三年（一九一〇年）には、かの幸徳秋水をはじめとする「大逆事件」が起り、先生の社会問題への関心を強く刺戟した。

「幸徳伝次郎一派によって企てられたという大逆事件は、強いショックでありました。幸徳は無政府主義を奉ずるものだと伝えられた。無政府主義とはいかなるものか、また虚無主義とはいかなるものか。……人びとはしきりに「危険思想」と

いうことを云った。危険思想が青年にとって魅力のない筈はない。当時、私たちの同僚や同年輩の友人に社会主義者と称すべきものは見当らなかったが、多かれ少なかれ社会主義に対して関心を寄せることは、皆一様であったといって好いでしょう。幸徳伝次郎、堺利彦の共訳による『共産党宣言』なども、私たちはすでに読んでいました」（小泉信三「私の履歴書」四九頁）と先生は当時を追懐されている。

先生は大正元年（一九一二年）義塾派遣留学生としてイギリスに向ったが、出発前にジェヴンス「経済学純理」の翻訳を完成している。ロンドンでは London School of Economics and Political Science の聴講生となり、キャナン、ボウレエ、フォックスウェルらの講義を聞いたが、これらの講義よりも多くの刺戟を受けたのは当時のイギリスの政治・社会の激動であった。「二十五歳の私が刺戟を受け、十九世紀以来の自由主義の変化、自由主義と社会主義の問題等について深く考えさせられたのは当然であったと思う。もちろん私は留学以前から社会主義の問題には注意をひかれ、福田徳三博士による啓発は別としても、ゾムバルトやディイルの著書、進んでは少しばかりの原典によってある程度の知識と意見とを持っていたが、イギリスの社会的現実が私の上にさらに力強い刺戟となったことは争われない」（小泉信三「私とマルクシズム」一〇三頁）。そして講義よりむしろシドニー・ウェッブの諸著作に刺戟されたといわれる（「慶応義塾百年史」別巻・大学編、一一三頁）。

ロンドンではチェアリングクロッス・ロードの古本屋街にある社会主義、無政府主義、婦人参政主義等、に関する急進的書籍のみ取扱うヘンダーソンという小さな店をみつけて、「何しろ、大正元年のその当時、日本ではウッカリ持って出歩くこともできないような、禁制の書ばかり店いっぱい並べてあるには驚いた。たちまちその家の常得意となり……書棚に並べてあるものも――小冊子類が多かったが――片端から買った。……かく手当り次第に社会主義文書をあさるとともに、系統的に近世社会主義思想および実践運動の由来経過を明らかにして、これに対する批評的態度を定めたいとの欲求がようやく強くなってきた」（小泉信三「私とマルクシズム」一〇三―四頁）。小泉先生の社会主義に関する本格的な研究のスタートは以上のようにしてはじめられた。

ロンドンに一年いて、大正二年（一九一三年）十一月ベルリン大学に移り、ここでは、グスタフ・シュモラーの「イギリスにおける階級闘争」、アドルフ・ワグナーの「資本主義と社会主義」、さらに経済原論及びその各論にあたる。フランツ・オッペンハイマー、ハインリッヒ・ヘルクナー、あるいは高等商業学校でのウェルナー・ゾンバルト等の講義を聞いている（「慶応義塾百年史」別巻一一三頁）。ここで第一次世界大戦の勃発を迎えるのであるが、その直前、一九一四年にたまたま出版された、マルクス「資本論」第一巻のカウツキー校訂「民衆版」を入手してイギリスに戻っている。（小泉信三、前掲書、一〇四―五頁）

二度目のイギリス滞在ではその大半をケンブリッジ大学（キングス・カレッジ）で過したが、アルフレッド・マーシャルは既に講義を止めており、そのあとをつぐピグー教授や、「当時まだ三十歳匆々の青年」であった若き日のケインズの講義を聞いている。さらに其後、パリのソルボンヌの法科大学で、シャルル・ジード、シャルル・リスト等の講義を聞き大正五年（一九一六年）三月足かけ五年の留学をおえて帰国した。帰国後直ちに四月から経済原論等を担当し、さらに社会問題（のちに社会思想史）、経済学史等の講義を担当した。それから昭和八年（一九三三年）十一月、慶応義塾長に就任するまでの十七年あまりが、小泉先生の大学教授時代で、その主要な業績、リカアドオ研究、経済原論、社会思想史、とくにマルクシズム批判、労働価値説論争、等々もこの期間になされたものであるが、その学問の基礎は右の留学期間に培かわれたもののように思われる。とくに留学中に興味をもった社会思想と経済理論のノートは、帰朝後の世界及び日本の社会的激動期に先生が自己の思想を確立し、またジャーナリズムに論客として活躍する資料として役立つこととなった。

先生が帰国して間もなく、ロシア革命（一九一七年三月及び十一月）が起り、その影響はハンガリーその他東欧諸国に波及した。さらに翌年には第一次世界大戦が終って（一九一八年秋）異常な好景気に対する激烈な反動がきた。日本国内では劃期

的な米騒動（大正七年、一九一八年）が起り、労働運動もまたこの前後から大規模となってきた。「茲に戦後の世界にいかなる社会を建設すべきかの問題が起って来た訳です。今日から顧みると、当時誰れも先きの見透しを持っていたものはなく、また、それが当然の次第でありましたが、しかし、人々が争って社会改造について、今まで思想家によって唱えられた様々の提案について知識を求めたのは当然でありました。」（小泉信三「私の履歴書」七九―八〇頁）

「『解放』『改造』その他これに類する雑誌は雨後の筍の如く簇生し、社会思想に関し多少の知識を有するものは世間の引っ張り凧になった。私がロンドン留学当時以来作成をつづけた社会主義研究のノオトも時々思いがけない役に立つことになり、それを利用して新聞雑誌に寄稿することもようやく頻繁になって行った。これは留学中の私の全く予想しなかったことであった。」（小泉信三「私とマルクシズム」一〇六―七頁）

ところで、社会主義、共産主義、無政府主義、虚無主義、サンジカリズム等々の多彩を極めた社会思想体系も、時の流れのうちにいつしか重要性を失い、その思想的理論的価値そのものからも、ソヴェート連邦の成立という歴史的事実からも、マルクシズムただ一つが残ることとなったので、先生の研究対象もこれにおのずからしぼられることとなった。そして問題の焦点も先ず最も基礎的な、マルクスの労働価値説、剰余価値、生産価格の理論に注がれた。けだし、資本主義か社会主義、共産主義かの理論闘争において、もしマルクスの労働価値説が支持されえないとすれば、剰余価値説も搾取理論も成立せず、マルクシズムの全体系が崩壊することとなるのであるから、この問題は最も基本的である。

「最初に不満を感じたのは、マルクスの価値、余剰価値、価格理論であった。

大正十年頃の日本では、マルクスの価値理論の批判よりもまだその解説が必要とされたと思う。有名なボエムの『カアル・マルクス及びその体系の終結』は、発表後二十数年を経た当時においても依然その価値を失っていなかったが、私はむしろ古典派経済学、ことにリカアドオの理論とその発展の経過を学ぶ間に、マルクスに対する批判が自分のうちに熟して行ったことを憶い出す。私がリカアドオ、マルクス、ロオドベルトスの価値理論に興味を感じ、その一人々々でなく、三人を一括して考察の対象としたのは大正七八年頃からであったと思う。私がマルクス一人を単独殊別のものと考察せず、これを同系の思想の流れにおいて捉えたことは、幸に正しかったと思う。これによって私は、マルクスもまた他の優れた理論家らと同じ問題に当面し、同じ困難に逢着したのであったことを冷静に認めることができたと思う。これによって往々一部のマルクシストに免れぬ、凝り過ぎひとり相撲に類する偏執と訓話癖とから免れることができたと思う。」（小泉信三「私とマルクシズム」一〇八―九頁、傍点伊東）

冒頭で指摘したように、先生のマルクス価値論批判は、「むしろ古典派経済学、ことにリカアドオ理論とその発展の経過を学ぶ間に、マルクスに対する批判が自分のうちに熟して行った」ものであって、リカアドオ、マルクス、ロオドベルトスの「三人を一括して考察の対象とした」研究の一つの産物であるところに特色がある。先生帰国後の「三田学会雑誌」執筆論文をみると、右の三人にさらにラッサール、ギルド・ソーシャリズム等を含めて、大正末年にかけて実に沢山のエネルギッシュな研究発表をみることができる。

ただここで注目されることは、先生のマルクシズム研究は、リカアドオ研究の経過のうちに総じて経済学説研究のうちに行われてきたということであって、マルクス資本論を理解するために不可欠なその独特の方法論、マルクスがヘーゲルに学び、これを逆立ちしたものとしてこれを変革して得た唯物弁証法、さらには唯物史観に関する先生の研究は、右の価値論批判の結論を得たあとで本格的になされたということであり、したがってまた、マルクスが「哲学の貧困」「賃労働と資本」「経済学批判」「資本論」へと、かれ独自の弁証法的方法に基き古典派の方法論的限界にもとづく経済学の諸成果のもつ限界を突破して、マルクス経済学の新しい体系を樹立するに至ったその経済学的研究の発展過程を、リカアドオ的立場からのみ考察されて、マルクスが資本論で展開したいわゆる「上向法」・論理的＝歴史的展開の方法はむしろ後からの抽象的思弁、

「後思案」にすぎぬとみられたことである。マルクスの「経済学批判序説」「ドイッチェ・イデオロギー」等も先生は当時も余り重要視されていなかったように思われ、「剰余価値学説史」もそれほど重視されてはおられなかったように記憶する。まして、戦後になって公刊された尨大な草案「経済学批判要綱」（一八五七―五八年）（Karl Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, (Rohentwurf) 1857—1858, Anhang 1850—1959, Diez Verlag Berlin, 1953）などは当時未発表で先生がみられるすべもなかったのである。しかも先生がヘーゲルからはじめて弁証法を本格的に研究されてからも、先生は弁証法的論理になじめず、元来の形式論理を固持され、この立場から唯物弁証法を批判せられていたと思われる。

「社会主義史を公にする以上は当然唯物史観に対する著者の立場を明らかとしなければならないことは最初から分ってゐたが、それがかく延引したのは、此問題に対する自分の考へがまだよく纏まらなかった為めであった。即ちマルクスの価値、余剰価値理論や国家観革命観に対しては、私は大正年中すでに一応自分だけの結論に到達してゐたが、最も根本的な歴史観に対しては、批判を加へる準備に一番時を要したといふ次第である。それは当然かもしれない。この準備に必要な学問に対し、私の素養は最も不足であった。

先づヘエゲル哲学から出発しなければならない訳であったが、これに対する私の知識は断片的で、理解は極めて不十分であった。」と先生は卒直に述懐されている。（小泉信三「私とマルクシズム」一六三頁、傍点伊東）

私は先生のゼミナールにいた当時からマルクスの資本論と唯物弁証法、唯物史観との関係の重要性、とくに冒頭の商品分析を理解するためには、これにもとづくマルクス独特の方法の重要なことを論じ、単なる交換比率論＝価値論とする従来の見方では到底、その真意をつかめぬこと、価値の量のみならず、質の問題、表現形態としての価値形態発展論の重要性、さらに商品の物神的性格に関する商品交換関係の社会的本質に関する認識の重要性等を述べたものであるが、先生は、「現実にあるのは商品の交換比率でしょう、これが労働価値説から十全に説明されないのでは困る」、という意味のことをいわれて、余りとり上げられなかった思い出がある。(注)

先生がマルクスの弁証法的方法を本格的に研究されたあとで、つまり資本論が書かれた方法を十分理解されたあとでこれを批判し、あるいは弁証法的方法自体を十分よく批判されたあとで、これにもとづくマルクスの経済学的分析を批判するという手順を踏まれなかったことを、今でも惜しむ思いである。

（注）右の方法論的問題を含めて、当時のマルクス価値論論争で問題となった諸点についての私の見解は「労働価値説の基本的考察」（「三田学会雑誌」昭和七年三月号）および「労働価値説の諸問題」（「三田学会雑誌」昭和七年八月号）の姉妹論文に述べておいた。マルクスの「資本論」が発表されてから西欧でひきおこされた同じ問題の論争とくにベーム・バヴェルクの批判やヒルファーディングの擁護論を含めて、日本における小泉先生をはじめ諸家の論争問題を総括しながら、私なりのマルクス労働価値説の解釈とそれの支持せられうる積極的理由を論じたものである。今読み直してみると「労働価値説の基本問題」においてマルクスのクーゲルマン宛の手紙などによる労働配分原理に関する私の拡大解釈と労働価値法則の積極的展開の試み、社会的効用概念の設定等、なおあいまいで、もっと厳密に考え直さねばならぬ点の多いことを反省しているが、「労働価値説の諸問題」において諸家の諸説の批判をしつつ私の試みたマルクス商品分析の理解は今日からみれば不十分な点が多いにしても、当時としては比較的正しい方向を志向していたものと思う。

戦後においては同僚の遊部久蔵教授が、当時より遙かに深めたヘーゲル哲学からマルクス弁証法、唯物史観の研究を基礎として、あるいはまた当時私が十分に意識しなかった「労働の二重性」との関連づけをはじめ、価値の実態、尺度、形態、本質等、マルクス商品論の構造を明確にすることによって、この問題の方法論的解釈に緻密な研究成果を発表されている。遊部氏の主要労作を年代順に掲げると「価値と価格」（昭和二十三年）、「マルクス価値論の根本問題」（昭和二十四年）、「価値論争史」（昭和二十四年）、「価値論と史的唯物論」（昭和二十五年）、「古典派経済学とマルクス」（昭和三十年）、「価値論研究史」（慶応義塾大学経済学会編「日本における経済学の百年」上巻所収、昭和三十四年）、「資本論講座」(1)（青木書店、昭和三十八年、所収の同氏論文）等がある。

戦前、私が未熟ながら志向した、マルクス労働価値説―商品論を方法論的に誤りなく理解しようとする方向の仕事を、遊部氏が戦

後、実にエネルギッシュに発展させてくれたことを、本稿を書く機会に改めて通読して感謝している。

ただし、方法的に正しく理解してマルクスの真意がつかめたからといって、これだけではマルクス解釈論の域を出ない。これによって、マルクス批判家の方法的無理解は反批判できたとしても、その方法自体が正しいかどうか、さらにその方法にもとづいて展開されたマルクス経済学の体系が正しいかどうかは別個の問題である。これは改めて問われねばならない。

なお、小泉先生は弟子の私が何の遠慮もなく先生の所論を批判し、これを学会誌に発表することを少しもおこらず、むしろその発表の推薦の労をとって下さった。自由主義学者としては当然のことのようであるが、当時の日本の学界の実情を考えると、義塾の伝統もさることながら、先生の言行一致の態度に深く訓えられるものがある。

先生晩年の述懐を読むと、「私は何時かマルクス批判者ということにされたらしい。そうして、それに異存はありません。私はたしかに批判者であった。私は多くの同時代人と共にマルクシズムというものに対して多くの関心をいだき、或る点その影響も受けている。しかし、結局彼れを、誤謬なき（Infalible）ただ一人の人と見ることは出来ない。彼れは私にとっては異色ある多くの思想家の中の一人に過ぎない。これがマルクシストと私の違う点であったと思います。経済理論に於ても、国家論に於ても、歴史哲学に於ても、マルクスの主張は全くの謬りではない。否な、非常に多くの価値あるものを含んでいることは、幾度もいわなければならぬ。ただ私は彼れの革命家としての局視或は焦燥による多くの誇張と偏説に同意しないというだけである」（小泉信三「私の履歴書」八二頁、傍点伊東）と述べている。これが先生のマルクシズムに対する立場であり、総括的結論でもあった。

四

先生のマルクス価値論論争は、学外の「改造」「解放」等の誌上で花々しく行なわれた。すでに、大正八年十月号の「改造」に高畠素之氏の「マルクス価値説・剰余価値説及びその批判」が発表され、ついで先生の「労働価値説と平均利潤率の問題―マルクスの価値学説に対する一批評」（「改造」大正十一年二月号）が発表された。これに対して山川均氏「小泉教授のマルクス批評を読む」（「社会主義研究」大正十一年五月号）における反批判がなされ、さらに小泉信三「再び労働価値説と平均利潤率の問題を論ず――山川均氏の批評に答う―」（「改造」大正十一年七月号）が書かれた。さらに先生は「資本論以前におけるマルクスの価値論、価格論」（「三田学会雑誌」大正十一年十一月号）において、「賃労働と資本」「価値・価格および利潤」等における リカアドオ流の見方からのマルクス価値説の「資本論」に至る変化を学説史的に追求し、明らかに矛盾する二つの思想がマルクスに併存したと論じ、さらに「価値論上に於ける生産費説と労働説―ロオドベルトス及びマルクスの学説の背景」（「解放」大正十一年十一月号）において、スミス、リカアドオよりジョン・スチュアート・ミル、ケアンズに至る正統学派の価値論の発展は、純然たる労働価値説が支持し難く生産費説に移行せざるを得ぬこと、労働価値説が成立するための前提は、（一）資本の有機的組成に異同なきこと、（二）自由競争の完全なることであるが、両前提は両立せず、（一）は原始社会に限るが、（二）は相当発達した資本社会に限る、したがって労働価値説は労働以外の要素（たとえばリカアドオにおける「時間」の要素）を入れて当然生産費説に発展せざるを得ぬ、ことを論じている。小泉先生のマルクス批判の要点は、右の正統学派の発展の立場から、マルクスの資本論冒頭の商品分析における労働価値説の等価交換の原則にもとづく証明は、第三巻の生産価格における平均利潤率の作用による価値と生産価格との乖離、等価交換の原則が行われなくなることと矛盾する、つまり平均利潤率の成立は労働価値説の抛棄を意味する、という点にある。

右の先生の二論文の発表と時を同じくして河上肇氏が「社会問題研究」誌上で「マルクスの労働価値説（小泉教授の之に対する批評について）」（その一、その二、その三、大正十一年十一月号、十二月号、大正十二年一月号）を発表されて論争に加わり、さらに櫛田民蔵氏が「マルクス価値概念の一考察（河上博士の『価値人類犠牲説』に対する若干の疑問）」（「大原社会問題研究」大正十四

年）を書いてこれに参加し、河上氏がこれに答え、（「マルクス価値概念に関する一考察（櫛田民蔵氏の同問題の論文を読みて）」社会問題研究、大正十四年二月）、このようにして小泉先生のマルクス批判が発端となって、河上、櫛田両氏をはじめマルクシストの間にも、資本論劈頭の「商品」の性質や、マルクス労働価値説の正しい理解、総じて資本論におけるマルクスの方法論の解釈をめぐって論争が発展した。マルクス批判家の側からも、高田保馬氏、福田徳三氏、土方成美氏、さらに後には二木保幾氏等々が参加し、この二木氏の「マルクス価値論に於ける平均観察と限界原理との矛盾」（「中央公論」昭和四年十二月号、これには同誌のすぐ二号あとに、三木清「資本論の冒瀆」昭和五年二月号、が方法論上の反論をしている）が一つの契機となって価値論論争は地代論論争にまで展開し、これにもまた高田氏、櫛田氏、向坂逸郎氏、猪股津南雄氏、河上氏等々が参加した。

右のようにマルクス価値論をめぐる論争は、大正十一年の小泉論文を発端として、昭和四、五年までつづき、昭和五、六年にはマルクス地代論をめぐる論争とまでなって展開して行った。ところで、このようなマルクスの「資本論」をめぐる論争が現実の苛烈な昭和恐慌下の労資闘争あるいは農民運動から遊離した傾向をみせていたとき、かかる実践運動の求める理論として、日本資本主義発達史、日本資本主義の現状分析がマルクス経済学者の間で進められており、かかる立場から野呂栄太郎氏が「櫛田氏地代論の反動性」（「中央公論」昭和六年十月号）を発表して、櫛田氏の「わが国小作料の特質について」（「大原社会問題研究所雑誌」昭和六年六月号）を批判したことは注目してよいと思う。こうしてわが国の経済学研究とその論争が、輸入経済学レベルの学説紹介―解釈の段階から、日本の現実にもとづき、実践的課題に答えうるや否やによって理論を検討するという段階に進むところまできつつあったのであるが、この時期につづく戦争とその下における思想や研究の自由に対する弾圧は、右の方向の展開をば、戦後にもちこすこととなったのであった。

小泉先生の価値論論争における論文は前にあげたものにつづいて「三度び労働費用と平均利潤との問題を論ず」（「改造」大正十四年四月号）において河上氏の批評に答え、マルクシストの側からも痛烈に批判された同氏の「価値人類犠牲説」を批判され、さらに「四度び労働費用と平均利潤との問題を論ず」（「改造」大正十四年十一月号）において河上・櫛田両氏のマルクス弁護説を批判し、両氏の間で解釈の対立する「資本論」劈頭商品の性格（河上説―資本制商品より資本制規定を論理的に捨象したもの、櫛田説―資本制生産以前の歴史上の単純商品説）に論及し、さらに社会的必要労働の二重の意味の問題や国際価値論、需給均衡無作用論の批判等を行っている。この論文に対する櫛田氏の批評にさらに答えるものとして「櫛田氏に答ふ」（「改造」大正十五年五月）が書かれ、論争形式の先生の論文はほぼこれで終るのであるが、これらの諸論文は、小泉信三「増補、価値論と社会主義」にすべて収められている。本書は戦後（昭和二十三年）稍長文の改訂版序と雑録三章を加えて再び出されているが、その終章の註に、「内藤赳夫氏の調査に由れば、大正八年から昭和三年末に至る期間におけるマルクス経済学説に関する論争参加者及び其述作は左記の通りであるといふ（雑誌「鉄塔」昭和八年第二巻第三号）」として次のような興味ある表が掲げられている（小泉、同書、三〇六―七頁）。

小泉信三　（単行本二、雑誌掲載論文一四）
山川　均　（単一、雑六）
高畠素之　（単一、雑七）
河上　肇　（単六、雑二六）
櫛田民蔵　（雑一〇）
土方成美　（単一、雑七）
舞出長五郎（雑四）
福田徳三　（雑四）
高田保馬　（雑三）

猪股津南雄（単一、雑三）

右は私が当時集めた諸文献からみると未だもれたものが少なくないが、当時の論争の盛んな模様を知る参考となろう。

なお、小泉先生の価値論についての最もよくまとまった労作としては、先生の「経済原論」（昭和六年）第三篇「価値及び価格」があり、マルクスの価値論のみならず剰余価値、搾取理論、「過剰の労働者と過剰の商品」（マルクスの資本主義崩壊説につながる理論）等、マルクス経済学のよりひろい領域の問題に関する先生の批判論文は「マルクス死後五十年―マルクシズムの理論と実践―」（昭和八年、戦後版、昭和二十一年）に最もよくまとめられている。

五

わが国はアジアで唯一の後発資本主義国としてすでに西欧資本主義が自由主義段階の成熟期に達したときに、ようやく明治維新を迎え、永い封建社会から脱して世界経済の仲間入りをし、急速に先進資本主義に追いつこうとしてその資本主義を育成した。しかもその資本主義が形成せられる過程は欧米資本主義が、独占資本主義、帝国主義といわれる段階へ移行する時期であったから、外圧も強く、内的矛盾を激しくした。欧米の古典的な自由競争段階をもたず、特権的財閥と広汎な中小・零細企業層との断層、さらに国民の半分を占めるおくれた農村、労働構造の特質等、頗るアンバランスな発展構造の上でその急速な資本主義化が進行したのであった。したがってその産業資本確立期と独占資本主義化とが、きびすを接してみられ、農業問題、中小企業問題、労働問題等に今日「二重構造」などといわれるような著しい特質をもたらしている。したがって欧米先進国の歴史的発展のうちに生まれた経済学の公式理論の機械的適用ではなかなか理解できない問題ばかりである。しかしこのことは先進国の理論を学ぶことが不要だということではない。むしろこの理論を深く正しく理解し、その有効性と限界とをしっかりつかみ、他方日本の経済の現実の実証的把握を行い、理論と現実との中間項を明確にしつつ、理論の吟味とそれの創造的展開を行うことが求められているのである。

日本の経済学研究に課せられたこのような任務は頗るむずかしいものであって、自然科学の発達に比して社会科学は著しくおくれており、戦後の今日、戦前と比較して遙かに進んだとはいうものの未だ頗る不十分である。しかし今からみれば、おくれていたと思われる先人の研究も、それは今日に至る必要な経過点であったのである。

明治期を通じて、見方によっては戦前までのわが国の経済学は、輸入経済学であった。明治初年のそれは翻訳経済学と呼ぶにふさわしいものであった。しかも当初はスミス、マルサス、リカアドオといった経済学創設の一流学者のそれの輸入ではなく、F・ウェーランド、A・L・ペリー、W・エリス等の自由主義経済学の教科書、普及通俗書であった。そしてジョン・スチュアート・ミルが最も永くあとまでもつづいた。アダム・スミスの「富国論」は明治十七年に漸く翻訳された。

自由主義（あるいは自由貿易論といった方がよいかもしれぬ）経済学の紹介は、当時の日本経済の現実とはそぐわぬものであったから、明治中期には国民主義的、保護貿易論のドイツ歴史学派の経済学が輸入され、これは実際政策上も理論的武器とはなったが、その所論はほとんどドイツ・イギリス等の諸事実にもとづくものであって、日本の現実をふまえたものとはなっていない。ドイツ歴史学派の後期、社会政策学派の影響は強く、日本社会政策学会が明治三十年（一八九七年）に結成され（ドイツ本国では一八七三年設立）日清戦争後、漸く発展してきた産業革命のもたらす社会問題に対応する研究、工場法案の検討等がなされたが、わが国の実態認識は不十分であり、学問的研究における問題意識と現実の政策的問題意識とはチグハグであった。

明治末年から第一次世界大戦にかけて輸入経済学といっても、漸くこれの本格的理解、消化の段階を迎えるのであって、ここで注目すべきは第一に歴史学派より理論経済学への展開がみられること、第二には社会主義思想の導入が盛んとなってきたことである。そしてこれにつづく第一次大戦後から昭和にかけて、日本資本主義の成熟、独占資本主義への発展にとも

なって、戦時のブーム、物価騰貴から戦後の慢性的不況、昭和の金融恐慌から世界恐慌へと、慢性的失業と農村疲弊、小作争議、労働争議の瀕発等々、資本主義の矛盾が累積されて現われてきた。

かかる情勢にこたえるものとして第二の社会主義思想のうち、マルクス経済学が最も強い影響力をもち、これはむしろアカデミックな大学内よりは労働運動、農民運動等社会運動家の手により民衆にまで普及され、経済学がはじめてわが国で大衆化されはじめた。そして大学内にも侵入して若いマルクシズムの教授が簇出されることとなり、大学の元来の輸入経済学の真価を問われることとなった。資本主義国の学界において学者を二分するように、これほどマルクシズムの盛んな国はない。これは前に述べたような日本資本主義の複雑な矛盾の現実に正統派経済学よりもマルクス経済学が適合していたこと、によるものと思うが、マルクス経済学もまた輸入経済学であり、その現実適用への努力が魅力的であったとはいえ、今日からみれば、理論の理解もその現実への適用も公式的、機械的であって、戦時の思想弾圧による空白はあったにしても、今日なおその感があることは、よく反省されなければならない。

これに対する古典派、正統派の経済学は当時学説的研究に止まり、日本の現実からの遊離の弱点をまざまざと示し、なかには外国原書の受け売りのみをもって任務が終ったかのようにみえる教授もあったから、学生をひきつける魅力に乏しかったが、戦後はいわゆる「ケインズ革命」以後の「近代経済学」が盛んとなり、とくにその計量的、実証的分析の努力はみるべきものがあり（量的現象面に止まるが）、官庁経済学として時の政府当局の政策に利用されるようにもなったが、これにもまた、欧米先進国モデルの機械的適用の弊害がみられる。

両者が理論を、経済の現実、とくに日本経済の現実においてその有効性を競い、切磋琢磨することが、今後の発展の道と思うが、小泉先生のマルクス価値論論争は従来の日本の経済学界において最も盛んに行われたものとして、かかる切磋琢磨の最初の例ということができよう。つまりこの論争において、小泉先生の批判によって、マルクシストを以て任ずる河上肇博士はじめ、そのマルクス理解の浅薄さを自認させられ（とくに著しい例としては河上氏の「人類価値犠牲説」）、資本論劈頭の商品の性格をめぐる河上、櫛田両氏のマルクシスト同志の論争にもみられる如く、マルクス経済学の方法的理解はこれによって深められた。小泉先生も自ら述べられているように、マルクスからいろいろ影響をうけており、とくにその「経済原論」を読むと基本的には異なる立場、異なる結論ではありながら、歴史的・社会的関係の見方をはじめ――先生自身はとくにマルクスを引用されていないが――リカアドオ等にはみられぬ、明らかにマルクスの影響とみられるところが少なくない。

さて、ここで小泉先生の、右に述べた日本における経済学発達史上の役割りを考えてみると、前に述べた理論経済学への展開期を担う第一人者ともいうべきであり、スミス、リカアドオ、マルサス、とくにリカアドオの深い理解を基礎として当時の経済学理論を集成・整理した人である。経済学史への接近の仕方も高橋誠一郎先生の克明緻密な文献学的方法と対照的で、つねに理論を求めて、理論体系をまとめようとする研究態度であった。しかし、先生独自の経済理論体系を樹立するまでには至らず、この点では教授時代僅か十七年で塾長の要職につかざるを得なくなったことは経済学者としての先生の完成にとって惜しまれる。古典派経済学を純粋にきわめられ、自ら「現代の古典派経済学者」として任じ、純粋理論、さらには戦後の「近代経済学」には向われなかったが、この新方向にも深い理解を示して後進を育てその橋渡しの役割を演じたことを認めなければならない。さらに先生の価値論は正統学派の生産費説の方向に向い、マルクスの求めた「価値」とは異質な、リカアドオの自然価格論であり、さらには前記の賃金論や「経済原論」にみられる分配論の傾向からみても「質」や「源泉」を問題とせぬ量的相関関係のみを問題とする「価値論なき経済学」への発展の素質を元来もっていたものと思われる。

マルクス経済学についてもその批判家ではあったが、これを相当深く消化した上の批判であったし、社会的熱情を内部に動機としてつねに燃やしつづけた研究態度であったから、先生によってマルクスを知り先生の批判とは逆にマルクシストとして大成した人々も少なくない。たとえば野坂参三氏は先生から「共産党宣言」等先生が留学から持ちかえった諸文献によ

る影響を述べており、野呂栄太郎氏は先生の講義を聞く学生であったし、立場はともかく人間としての先生をかれの死に至るまで尊敬していたようである。

先生がこのようにマルクシストを育成するのに影響があったとともに、義塾経済学部の経済理論、経済学説史、あるいは社会思想史研究の上で、良心的な学風を後進に遺された影響ははかり知れない。またマルクスに傾くものにもこれを絶対視せず、ひろい視野からこれを吟味して、その上でとるべきものをとる、という正しい科学的態度を教えられた。

先生が勉強をする場合にも、その他の人間活動においても、つねに二流、三流、あるいは亜流を好まず、先ず第一流を対象とすることを心がけ、後進にもこれをすすめたことの意義も忘れられない。われわれ学生時代、先生のゼミナールでつねにいわれたことは、「マルクスならマルクスの原典を読め、片々たる亜流のパンフレットや普及書にたよって時間を浪費するな」としばしば注意された。日本の経済学発展史において先生が、古典学派を学び、とくにリカアドオに打込んだということは右の先生の態度からくるものと思われ、しかもリカアドオを真に消化して日本にひろめたのも先生の第一の功績と考えられる。

義塾経済学の発展は、ドロッパース、ヴィッカース等のアメリカ人教授の指導下における理財科の創設期（その創設は明治二十三年、一八九〇年）を経て、明治三十二年海外に派遣された若手教授の中で、とくに堀江帰一、気賀勘重の両教授(注)によって漸く基礎をきずかれ、福田徳三教授による西欧学界における最新の問題意識の紹介と刺激もあって、小泉、高橋両教授によって本格的に確立されたとみることができよう。これはまた前に述べた日本全体の経済学の発展段階とも照応し、義塾経済学はその一つの主流を構成してきたのであった。

（注）堀江帰一教授は金融及び財政研究で重きをなした。当初は自由主義論者であったが、再度の留学（明治四十三年）において救貧法、工場法、イギリス社会問題等に関心を深め、その晩年、ヒューマニズムにもとづく社会改革的熱情と社会問題への深い関心から、その立場を変え、新興労働者階級に呼びかけ、労働運動の自由を主張し、治安警察法第十七条の撤廃を要求し、安部磯雄、吉野作造氏たちと最初の労働者政党である社会民衆党の創立に際し、その産婆役をつとめたことは特筆すべきである。

気賀勘重教授はドイツ留学中、ゲッチンゲン大学ではグスタフ・コーン、ライプチッヒ大学では歴史学派の巨匠、カール・ブュッヒャーに師事し、ドイツ歴史学派の政策理論の導入、とくにオイゲン・フィリッポヴィッチの経済原論及び経済政策の大著の翻訳を行い、あるいはまた、アダム・スミス「国富論」（上巻）の翻訳等も行い、経済原論、工業政策のみならず、とくに農業政策において重きをなした。（「慶応義塾百年史」別巻、大学編、経済学部、参照）

〔後記〕本稿はさらにマルクス労働価値説論争自体の内容について述べ、当時より今日に至るその研究の発展から当時の評価をし、さらに小泉先生が「マルクス死後五十年」において述べられているより高次のマルクス経済学諸理論批判（「搾取理論の根拠」「余剰価値と利潤」「過剰の労働者と過剰の商品」等の論文）にも言及する予定で準備もしたが、時間と紙数の制約で、内容については頗る断片的なものとなり、とくにマルクス経済学側からの積極的解答と、さらに今後に残された基本的問題点等には殆んどふれることができず、概括的感想に止めざるを得なくなったことを今は亡き先生に対してお詫び申上げる。